

調査研究報告レポート

調査研究報告

信州の風景画を遺した中村善策

調査研究係 三枝 善彦

調査研究係として任命を受け微力ですが洋画家・中村善策の作品と人生観について紹介させていただきます。

私の住む長野県安曇野は第二次世界大戦時に疎開する画家が集い多くの作品が遺されました、そのお一人として中村善策（なかむら ぜん さく 1901年12月29日～1983年4月27日）が居られます、氏は北海道小樽市に生まれ、東京に転居、先の戦争では東京大空襲で家屋全焼（絵画作品も消失）裸一貫と成り、風光明媚な長野県明科町（現・安曇野市）に4年間疎開しました。この間には地元の作品は無論、各地の景勝地を訪ね多くの風景画の分野で優れた作品を残したことで知られています。

本名は中村善作。中村の風景画は写実を基にし、明るく開放感にあふれている。「善策張り」と言われるその画風は、荒々しい原始的な自然ではなく、人々の暮らしの中でみられる人間味にあふれた風景画が特徴となっております。そして後に住まいを東京新宿上落合に転居されました。

戦後、「一水会」で活躍する一方、日展で活躍し「日本芸術院賞受賞」、「勲四等旭日小綬章受賞」を受ける。又、出生地・北海道には「小樽市立小樽美術館」に「中村善策記念ホール」を開設し貢献しました。

そこで、調査研究テーマを「信州の風景画を遺した中村善策」とした。

中村善策の生涯

1901年（明治34年）北海道小樽にて誕生しました。少年期、小樽洋画研究所にて絵画製作を学び研究所の設立者より「絵具をもらい、油絵の制作」を始める。

1924年（大正13年）上京し、翻訳の仕事しながら川端画学校に通います。そんな善策が信州に初めて訪れたのは1925年（大正14年）友人に誘われて松本にて絵画製作した時でした。この頃より作品の題名に信州と名の付く作品を発表するように成りました。

1928年（昭和3年）に結婚し故郷小樽へ戻り新生活をはじめます。居住した地区には「小林多喜二」が居り、交流がありました。

1931年（昭和6年）住まいを北海道から東京に移す。

1936年（昭和11年）には第23回二科展出品作「白い灯台」と「獨航船」特待受賞1937年（昭和12年）には一水会展・昭和

和洋画奨励賞受賞、一水会会員推挙、絵画雑誌「みづえ」や「美術新論」などで美術批評を執筆しています。

1945年（昭和20年）4月3日 戦争が激化したこの頃、善策は長野県明科町（現・安曇野市）へ疎開します、滞在先は明科駅から遠くない長屋の一角「丸か旅館」で四年間を過ごしました。入居後、突然同旅館にアララギ派の歌人「岡麓」が避難してきました。この時、岡麓より善策は東京が空襲で全滅した様子を伺う。そして翌日、アトリエ及び作品200点余りが焼失したと連絡を受けました。落ち込んでいる善策に岡麓は「一生に一度は良い経験だ」とウイスキーをお土産に励ましたとの事。

当時、松本に疎開していた「石井柏亭」はもともと岡麓も知り合いで、旅館を訪れ積もる話に花を咲かせました。善策は次のように振り返ります。疎開中は石井伯亭先生の眉安居3月10日の戦火にあい、松本市街の浅間温泉に避難して居られたので、しばしお尋ねする機会に恵まれた。明科町の善策の宿にもたびたびお出かけ頂き窓辺から眺める、「鍋冠山・大滝山」をスケッチされ、近くの犀川の畔で写生にお供することも有った。

善策は雪袴を着けて村夫子然として明科駅へ下り立つ。

何しろ「芸術院会員だから一等パスをするので」駅員は妙な顔で、白い美髪の先生を迎えた。石井伯亭のこの信州生活程、はた目には愉快そうに為さるも、一方では多忙ながら毎日が充実されていたことはなかった。

善策は信州での疎開中、石井柏亭と共に「信州美術会や中信美術会」の結成に関わりました。終戦から5年後1950年（昭和25年）第六回日展の審査員に推薦されました、その後、東京に帰り新しい家をたてたのを機に東京に戻ります。

善策は1967年（昭和42年）第10回日展「石狩湾の丘の邑」で文部大臣賞受賞

1969年（昭和44年）第11回日展「張碓のカムイコタン」で日本芸術院賞受賞

1978年（昭和53年）勲四等旭日小綬章受賞

善作は、信州明科との別れは為せず、その後、度々信州を訪ね作品制作に努めるのでした。地元信州の公民館報や地元には多くの文章を町民に寄せ信州明科で過ごした日々を振り返っています。

1983年（昭和58年）81歳でこの世を去りました。

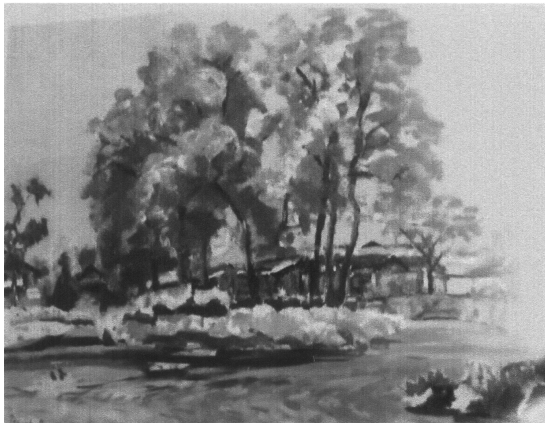
この度、調査を担当させて頂いた「調査研究係・三枝善彦」の住む長野県明科は安曇野と地名を変えています。

当地の景観は日本全土の中でも有名な、北アルプスを背に上高地・安曇野・白馬を配した地形に有り中村善策・石井柏亭先生をはじめ多くの美術家が当地を訪れ、作品を残されています。

中村善策の作品紹介

◎作品名：水辺一

制作：善策が明科を離れ、東京の転居に移られて仕上げた作品です。岸部に咲く草花川の流れに沿うように流れる川瀬。背後には住宅地、そして遠方には緑葺き山岳が背景に描かれ、信州の雰囲気が出た作品に仕上がっています。



◎作品名：信濃は初雪

制作：第8回日展に出品した作品と同じ構図で、何点も描いています。安曇野から構図を決めたもので手前に安曇野の集落を入れ奥には低山を遠方にはアルプスを入れ、豪華な構図で描かれている町は緑系、山の中景は紅葉で染まり、奥の山は雪をかぶり、それぞれの景観をみせている。



◎作品名：北アルプス連峰

制作：右手、近景には樹木を抱いた、さわやかな低山が緑に茂り、田植え前の水の張られた畑中景の山を配し、奥にはすっかり雪で覆われた北アルプスが配置され、信州の代表的な風景がのぞく善策の作品には何度も見られる。



◎作品名：安曇野於いて明盛

制作：紅葉の終わりを表すように街の風景、中景には大きな山が聳え、これから訪れる冬の季節を思わせる背後には雪に覆われたアルプス、作品は山も民家も樹木も筆勢が素晴らしく作品は迫力のある作品となって仕上がっている。



◎作品名：水辺二

制作：第2回日展に出品した作品です。昭和26年「名勝明科」と題して次のような文章を残しております。「この地にいる間に私の中央に出品した大作は『文展へは・連峰悠久』の50号、戦後第1回日展への登竜門として『冬閉』といずれも信州の風景画が中心であり私の人生は信州そのものです」...と語っている。



◎引用・参考文献・協力者

- ・中村善策・後継者 中村 憲 氏
(東京都東久留米市上の原 在住)
- ・北海道小樽市立小樽美術館 館長 苫名 真 氏
- ・長野県安曇野市豊科近代美術館 館長 清澤 栄三 氏
- ・長野県安曇野市教育委員会 教育長 橋渡 勝也 氏

各氏より「著作物使用許可書または掲載承諾書」を受領済み